**○１番（豊村貴司君）〔登壇〕**

（全般モニター使用）おはようございます。議長より登壇の許可をいただきました。１番豊村貴司です。

私はこれまで 20 年間、リハビリテーションの職員として、医療介護の現場で、障がいを持つ方々、高齢者の方々と接し、さまざまな声を伺ってきました。少子高齢化、人口減少等言われてる今、国として社会保障費は年々膨らんでいる状況です。国、地方として、そしてこの武雄市としても、対策をとらないといけないことは間違いありません。

その中で、国保の会計について、これも全国的なことではありますが、この武雄市においても単年度の会計赤字、そして、それを補うための一般会計からの法定外の繰り入れを行っているところでもあります。加えて、合併後の特例措置であった合併算定替えが、将来一本算定となることによる交付税の減、それによる財政への影響等も考えられています。これら財政状況が、皆さんの生活に影響を及ぼさないよう、また子どもたちの環境への影響、そして、市民の福祉の圧迫が起こらないようしていかなければいけません。

私は、武雄市の未来をじっと見ているのではなく動いていかなければならない、そういう思いでこれまで来ました。まちづくりの活動を通じても、武雄市には未来を思い、活力を持った方々がたくさんいることを私は知っています。武雄はまだまだ輝ける、潜在的な力がたくさんある、そういうふうに思います。

市長。市長もその活力を持った１人だと私は思っています。市長自身、これまで就任からさまざまな政策を展開され、それぞれにたくさんの思いを持たれていると思います。私たち武雄市民としても同じように、さまざまな思いはあるにしても、武雄市の動きに皆さん思いを持ってきました。

そして、まさに今、新たな改革として、武雄市は官民一体の教育改革に取り組もうとしています。私にも、４人の子どもがいます。同じ子育て世代の保護者の方や知り合いからも、この点については、いろんな意見を伺っております。

市長は言われました、教育に命をかけると。先ほど述べました、これからの社会変化の中、生活や仕事の場などにおいても、どのような変化があるかわかりません。こういった点からも、既知の収得という形から未知とも言うべき時代の変化に対応できるようになる、そういった学びの形も必要となってくると思います。

そこでまず、市長に問います。教育に命をかけると言われたその覚悟、その思い、そして、目指すところについて改めてお聞かせください。

**○議長（杉原豊喜君）**

樋渡市長

**○樋渡市長〔登壇〕**

肩の力が、こう入られて。８年前の自分を見ているみたいだったんですね。やっぱりね、

20年間仕事をされて、現場でいろんなものの見方をされていると、私はよく知っていますので、ぜひこれからの活躍を期待したいと思うんです。

教育に関して言うと、豊村議員さんがおっしゃったとおりだと思います。既知のもとにじゃなくて、未知なものにどう対応するか。ですので、恐らく10年前に今のような社会が出てるっていうのは、だれも思わなかったと思うんです。10年前に、もはや。20年前ってなると、明治と近いぐらいの形になっているんですね。

先日、東京ラブストーリーを見たんです。そしたら、鈴木保奈美さんが、携帯っていうと、こんなでかいね、ショルダーバッグの――なっててとか。あるいは、そのあとにポケベルが出てきたりとかっていうのは、およそもう――ね。だから、これからの10年後、20年後っていうのは、恐らく同じだと思うんですね。

そういったときに重ねて言いますけど、未知なるものに対応できる力を、やっぱり小学校のときに養わなきゃいけないということ。しかも、小学校のときに、押しつけじゃなくて、強制じゃなくて、わくわくどきどきした体感で授業が学べるように。だから、代田教育監がよくおっしゃいますけれども、世界一行きたい小学校をつくると。月曜日になったら待ち遠しいと、私たちはそういう教育を進める必要があるだろうと思っております。それが結果的に、よく高濱先生も、うちの教育長も私も言いますけれども、やっぱりメシが食える魅力的な大人をつくんなきゃいけない、いうことを思っていますので、そういう意味で、ある意味、未知なるというところに、我々は前人未踏の領域に踏み込まなきゃいけないということになっていますので、ぜひ、豊村議員さん、そして議会のお力を借りていきたいなというふうに思っています。ですので、今までの正解至上主義じゃなくてね、自分で正解をつくっていくんだと。世の中を切り拓いていくんだというような大人を、小学校の低学年のうちからつくる必要があるだろうと認識をしております。そういった中で、さまざまな施策をしていきます。まだまだ、官民一体学校も序の口であります。ですので、それを議会とともにやっぱり議論をよくしていきながら、子どもたちの目線に立った教育をぜひしていきたいなというふうに思っております。

私はぜひね、豊村議員さんの教育改革に対する思いをまず伺いたいと思います。

**○議長（杉原豊喜君）**

１番豊村議員

**○１番（豊村貴司君）〔登壇〕**

今、市長のほうから、教育改革に対する思いということでありました。確かに今回、市長も言われています、高濱先生も言われてましたが、メシが食える大人ということです。

やはり私も20年間、会社の中で勤めてきました。もちろん、学校を出て、新人のときから管理職という立場までですね。その中で、やはりいろんな状況というのを自分でも経験してきました。さまざまあります。もちろん、仕事の場だけじゃなくて、プライベートでもい

ろんなつき合いがあったり、いろんな場があります。そういうのを見ているからこそ、メシが食える大人というのはですね、そこは、非常に私自身も納得できるところであり、それが例えば、今回、官民一体というふうな形で、教育改革とありますが、そこに私自身も、民間という立場で今までいましたので、やはり民間のノウハウというのはあると思うんです。時代を、先を見たりとか、そのときに合わせたりとか、また柔軟に対応したりとか。そういったところが、民間の得意とするところかなというふうには思います。ですから、今回の分でですね、官民一体の教育改革、それが単に学力ということじゃなくて、メシが食えるという部分でですね、確かに子どもたちが大人になっていただく。これから先、いつ死ぬかわからんわけですね。そういうときでも子どもたちには、しっかり自立して生きていってほしいと、そういう思いがあります。ですから私自身、今回の教育改革という部分で、賛同するところであり、しっかり、またそれがよりよいものであるためにですね、議員として見ていかなければいけないと思っています。

では、質問のほうにいきますが、スマイル学習についてまず伺いたいと思います。ことし４月からスマイル学習として始まりました。スマイル学習課が立ち上がり、武雄式反転授業ということでですね、始まったところです。４月には小学生の全生徒にタブレットを配付して、うちにも３年生と５年生が、小学生いますが、最近になってですね、タブレットを持ち帰ってきて、これは実はうちの娘です。三女と次女で、三女が持ってきた分をやっているところを、次女が興味深そうに見ている。私も、そばで見ているという状況です。

確かにことの初めということで大変な面があったと思います、準備等ですね。そういった面も踏まえて、スマイル学習、準備から現在まで、経過としてどういった形で流れているか、そこを改めてお伺いいたします。

**○議長（杉原豊喜君）**

代田教育監

**○代田教育監〔登壇〕**

今、豊村議員のほうから、今までの経過ということで、私のほうから御説明させていただきたいと思います。

まず、答弁の冒頭にあたってですね、私のほうから、多くの議員の皆様のお力添えをいただきながら、１人１台と、非常にすばらしい環境の中で教育活動がスタートできたことについては、本当にありがたく嬉しく思っております。私のほうから、お礼申し上げたいと思います。ありがとうございました。

（モニター使用）４月９日の全小学校 11 校の入学式の式次の中に、ＩＣＴ機器の貸与ということで、全市の小学生にタブレット端末が貸与されました。最初は先生方も慣れていない、子どもたちも慣れていないという状況の中で、ここ１カ月間は、まずスマイル学習をやるというよりは、簡単な写真を撮るとか、小テストをやる、簡単なドリルをやるということ

で、今先生と子どもたちが慣れているという状況で始まっています。これは、ドリルをやっているところですね。

スマイル学習ですが、昨年度の１月から３月までに全小学校の先生方が算数と理科の予習動画を中心となってつくりました。それが５月の中旬から持ち帰りが始まっているという状況です。もちろん、先行している小学校と、少し遅れている小学校ありましたが、先週末の段階で 11 校全ての小学校の中で持ち帰りがあって、このスマイル学習始まっているという状況です。現状については以上です。

**○議長（杉原豊喜君）**

１番豊村議員

**○１番（豊村貴司君）〔登壇〕**

ありがとうございます。

スマイル学習ということについても、ですから、もちろん、反転授業という部分で導入前は説明会等ありましたが、もちろん、その言葉自身知らないという人が、もちろん多かったわけです、私も含めてですが。導入前は、さまざまな保護者の方からも不安の声というのが上がっていたと思います。

実際は、先ほど言いましたように、うちの子ども、こうやって持って帰ってきて、やっているのを見て、子ども自身はですね、こういうのをやっぱり、興味をもってやっている、それはもう間違いないです。そこで、ただタブレットだけじゃなくて、ワークシートという形で書きながら、これをやるという形で。また、それを学校のほうに持ち帰っている。私自身は、効果的な使い方ができてるのかなと思いますが、改めて伺います。

先ほど言いましたように、実施前にあった不安の声とか、そういったのが実施した後、現在、保護者の方とか子どもさんたちから、どういった反応が、声が上がっているでしょうか。その点について、お伺いいたします。

**○議長（杉原豊喜君）**

代田教育監

**○代田教育監〔登壇〕**

現状、今、保護者の、実施しているアンケートをとると、おおむね好意的に捉えられているというふうに考えています。今まで宿題をやらなかったんだけれども、タブレット端末を持ち帰ると意欲的にやっているという声が非常に多いです。懸念されていた、やり過ぎとか、タブレット端末をずっと見ているという状況は、実際にはインターネットにつながないので、そこら辺の問題点については今聞こえていない状況です。

実際に、じゃあこれ宿題に出して、予習動画を見てきなさいという形で、宿題を出したときに、ほぼ 100％の割合で、子どもたちがやってきているという状況で、スタートとしては非常にいい状況で始まったんじゃないかなというふうに捉えています。

**○議長（杉原豊喜君）**

１番豊村議員

**○１番（豊村貴司君）〔登壇〕**

今、説明ありましたが、私がその後にちょっと伺おうと思っていたのが、予習ができてない子ども、そういった点がどうかなと思ったんですが、ほぼ予習できているということで、その点についてはよかったと思います。

ちょっと伺いますが、スマイル学習ということで算数と理科ということで取り組まれていると。算数と理科というのはなぜなんでしょうか。ちょっとその点についてお伺いいたします。

**○議長（杉原豊喜君）**

代田教育監

**○代田教育監〔登壇〕**

武雄式反転授業、算数と理科で、算数は３年生以上、理科は４年生以上で行っているんですが、算数と理科の教科を選択した理由としては、まずシンプルに、アメリカでの教育効果が高いという報告がなされているということです。予習をしたときにいろんな教科でやったときに、それが非常に出やすかったという結果があったというのが１つ前提にあります。

実際に教科の特性から見てみると、やはり算数は非常に、積み上げなので１個１個、何かわからないところがあるとつまずいてしまう。そうしたときに、個人学習でしたほうが非常に効率的である。つまり、一斉に教えて、じゃあ、わかった、というよりは、自分で積み上げていったほうが、そして、わからなかったところまで戻る。こういった教科の特性があるので、そこで効果が出やすいんじゃないかなというふうな見方があります。

理科のほうは音声と画像で見れる。ここの特異性があるんじゃないかなというふうに思います。例えば太陽ができるまで、ビッグバンみたいな説明をされてもなかなかイメージつかないんですが、映像で見たら一発ですよね。要は映像の力が強い教科である。ここら辺が理科の予習で、じゃあ、次どんな、あした授業やるのかなと。

こういうところで、スマイル学習、武雄式反転授業の特性としても、理科と算数が非常に効果が出やすいのではないかというふうな仮説のもと、取り組んでいます。

**○議長（杉原豊喜君）**

樋渡市長

**○樋渡市長〔登壇〕**

恐らく行く行くは、やっぱり同じことを教えるにしても先生が違うと全く違うんですね。例えば東進ハイスクールの林さんが、僕は聞いたことあるんですけど、今まで僕が、もう受験から二十数年経ったときにわからなかったことが、「今でしょ」の林さんが言うとわかったんですよ。同じ教材ですよ。だから、これからは恐らく武雄市の先生たち、非常に優れた先

生がいらっしゃいます。教え方にしても。ですので、そういった、10分から15分くらいで、特にもう分子分母とかってなるともう、分数ね、わからなくなるんですよ、そこで。そこが第一の壁なんですよ。ですので、そういうふうに、今は教材として、いわゆる、副教材ですよね、ある意味ね。それが今度は映像としてそれを先生が実際教えるところまで、僕は踏み込んでいきたいなというふうに思っております。

これはもう、例えば大学レベルでは、もう、これは普通に行われているんですね。例えば、日本だと東京大学、それで、アメリカだとＭＩＴ、マサチューセッツ工科大学とかってやっている。それから、あるいは、カーアカデミーでやっていることを、もう少し、子どもたちにわかりやすい形で踏み込むときが来るだろうと思っています。

ただ、今はやっぱり導入時期でありますので、僕は理科と算数を最初に先行してやってるのは大賛成。それが落ちついたときに、今度は先生が実際に教えるところも、やっぱり、こう、あってしかるべきだというふうに思っております。

**○議長（杉原豊喜君）**

１番豊村議員

**○１番（豊村貴司君）〔登壇〕**

ありがとうございます。算数と理科という分で効果があると。

先日、山内東小学校の公開授業のほうに行ったとき、それプラス生活だったですかね、タブレットを使ってされてるということで、確かに展開っていうのがどんどんできてくるのかなと思います。

そこでですね、先日、東京のビッグサイトのほうに、教育ＩＴソリューションエキスポというところに行ってきました。日本最大の学校向けＩＴ専門店ということでですね、すごい数の教育に関するパソコンとかタブレットとか、そういったＩＴ系の展示があって、商談が行われているということで、３日間で２万7,000人の学校関係者とか教育関係者の来場があったということです。

やはりですね、私そこで見ていて思いました。タブレット、もちろんさまざまあって、それに関する教材というのもいろんなメーカーが取り組んでいる。そういうのを、やっぱり目の当たりに見て、武雄が今やってるっていうことは、恐らくあっという間に全国展開するだろうなというふうな形で思いました。こういったＩＴを使った教育というのも進んでくると思います。ただし、やっぱりすべてをＩＴでという形ではもちろんないと思います。効果的に使える部分をそれで使うと。

そこでですね、市長も先ほども言われましたが、これから先生が動画をつくったりとか、先生が入るような動画とか、いろんな動画があると思いますが、このときに学校で撮影をするようなスタジオの展示とか機械とかもあったんですね。スタジオセットとか。それはさすがにどの学校にも置くというのはちょっと厳しいと思います。

ただ、先ほど言いましたように教育関係を含め、いろんな部分でＩＴという部分でですね、これからどんどん進んでいくという中で、例えば企業誘致の一環としてですね、また連携として、そのＩＴ系の企業と連携するとか、企業誘致の方針としてこういったところも取り入れていくとか、そういった方針についてはいかがでしょうか。

**○議長（杉原豊喜君）**

樋渡市長

**○樋渡市長〔登壇〕**

連携は、もう今、進めているんですね。代田教育監のもと。例えば、ニュートンさんであるとか、ワオさんであるとか、あるいはリクルートさんであるとか。もう、結構やっぱりあちらから今、連携したいということです。ちょっと固有名詞をね、出すと、語弊があるので、もうこれ以上言いませんけれども、やっぱり我々と組みたいというところも来ています。

実際ですね、東京とうちで、こう連携といったら、ちょっとしんどいんですね。ですので、恐らくこの連携が進んで、さらにいろんな、例えば教材をしたときには、企業誘致じゃなくて企業進出になると思うんです。そういう形での、私は教育ＩＴの皆さんたちに、ぜひ武雄にお越しいただきたいというふうに思っています。その上で、私はちょっと、現場には行かなかったんですけど、ＮＨＫでこう見たときに、ちょっとやっぱり違和感があったんですね。やっぱり、いろんな、例えばスタジオだとか教材だとかというのは、何かこう押しつけるような感じで、私は受け取ったんですね。武雄が唯一違うのは、代田教育監のもとで、要するに学校の先生と企業と一緒に、これこそ官民一体なんですよ。それで、子どもたちのための教材をつくってるということですので、そういう意味で言うと、これはなかなかね、私まねできないと思います。まねできないと思いますので、そういう意味では、今のうちに先行者の利点を生かして、やっぱり先行してるからこそ企業さんがたくさんお見えになると思うんですよね。その間にさまざま魅力的なコンテンツ、内容を積んでいきたいなというふうに思っております。

**○議長（杉原豊喜君）**

１番豊村議員

**○１番（豊村貴司君）〔登壇〕**

私もですね、やはり企業さんが近くにいるということで、そこで先生たちとですね、直で意見交換をしながらできる環境、まあそのためにはやっぱり近くにいてもらったほうがいいのかなというふうに思ってます。まあ、そういう意味で、連携であったり進出であったり、そういったところが進んでいけばなと思ってますので。実際に今、声がかかっているというところもあるということですので、これについても今後見ていきたいと思います。

そしてですね、このスライドですが、これはうちの娘が３年生で、小学校３年生の親子ふれあい行事というのが先日ありまして、そこの中でですね、スマイル学習についての体験会

というのがあったんです。このとき、100 組ぐらいの親子がいたと思います。これ、学校の先生がですね、電子黒板を使って、このときみんな保護者がずらっといてですね、それぞれにこういう形で――これ娘ですけど、この横に私がいて、一緒にこう触りながら、先生がこういうふうに授業でやってますよというのを示しながらですね、体験をしてきました。実際にスマイル学習始まって、子どもたちも家に持ち帰って授業でしてというのが、だんだんと始まってると思いますが、まだまだ知り得てない保護者の皆さんもあると思います。

そういった意味でですね、今後、こういった形であったりとか、授業参観のほうにはスマイル学習をちょっと見てもらうような形をとるとかですね、保護者に対して、この部分をお知らせするという形での考え、方針というのはいかがでしょうか。その点について伺います。

**○議長（杉原豊喜君）**

代田教育監

**○代田教育監〔登壇〕**

今の御質問に対してはですね、ぜひ多くの市民の方々に見に来ていただきたいということで、今年度、オープンデーという名称で各学校２回、いろんな人が来てですね、授業の内容について説明できる機会を設けています。各学校２回ですので、年間 22 回行っていきたいというふうに思います。（モニター使用）写真のほうはですね、５月 30 日に行われた武内小学校の公開授業の様子です。こちらのほうが５月から２月までの年間の予定になっていますが、少ない月で２回、多い月で３回、これは市民の方々が実際に見て体験していただくという機会になってます。実際に５月 30 日に行われた武内小学校の説明会、オープンデーのほうにも、ほかの学校からも保護者の方が来ていただいたりしたので、こういう形で情報共有しながら、常に公開していくというスタンスでやっていきたいというふうに思っています。

**○議長（杉原豊喜君）**

１番豊村議員

**○１番（豊村貴司君）〔登壇〕**

やはりですね、知っていただくというのは、まずもってやっぱり大事なことです。

そこで、まあ知るということでもう１つ、これからすごく大事になってくる部分、私も冒頭述べましたが、官民一体の教育改革。この点についてですね、保護者の方であったり知り合いからいろんな意見を伺っているところです。私もですね、授業風景を、実際に埼玉のほうに行きまして、それを見てきました。中身についての説明なども聞いてきましたが、きょうは一般質問の初日ということでですね、この点に興味を持ってらっしゃる方も多くテレビで見られたりされていると思います。先ほどの知っていただくという部分でですね、この点についてもしっかり質問をしていきたいと思います。

そこで、市長もこれまで何度となくメシが食える大人にと言ってこられ、公教育の中に民間のノウハウ、活力を入れながら、子どもたちが将来自立して、魅力ある大人となるよう取

り組んでいく。その方法として、名前が挙がってますが、民間の花まる学習会と連携を図っていくとされてます。その発表があった後に、メディアのほうでも各種報道があってですね、その授業風景が流れました。子どもたちと先生が一緒にこう、手を挙げて声を出してというような、そういう風景が切り取られてありました。すごく、あれはですね、いろんな意味でインパクトがあったと思います。

私もそれを見た上で視察に行きましたが、まずその最初の発表からメディアでの報道、今までの段階で市長の思いとかですね、地域の方の反応とか、そういった点はいかがでしょうか。

**○議長（杉原豊喜君）**

樋渡市長

**○樋渡市長〔登壇〕**

やっぱり映像って怖いなと思いましたね。病院のときもそうだったんですけど、映像で切り取られてそれだけ出てくると、やっぱりそれが印象に残ってしまうということで、今回ちょっと問題にしているのは、わーってほら、モジュールのときになって、そこが結構出てきたんで、あれをなんかこう１日中やるんでしょうかということ、結構僕のところにもあったんですよ。それ無理ですよ。ですので、あれは朝の 15 分ないし 10 分でね、その中でもあれ、４、５分なんですよ。ごらんになってわかるように。それで、そのあとに、例えば一知半解とかわーっとやった後に、その後にすぐぱって切り替えて、与謝野晶子のみだれ髪の音読は、小学校１年生とか、２年生でやるんですね。それは静かにやると。あるいは算数について、こう考えると。だからあれメリハリのメリのほうなんですね。どっちだっけ、ハリのほうだっけ。まあどっちでもいいか。だからメリハリがこうあって、今の学校教育――僕は小学校のとき不登校です。不登校で、一番僕が嫌だったのは、ずっと椅子に座っておかないといけない、じっと。なんか喋ろうとすると、黙って聞きなさいって。俺、口あるのになと思っていましたよ。だから、それがすごく僕に圧迫感があって、ああいうメリハリがあったらね、もっと僕はまともな大人になったと、僕自身思っているんです。（笑い声）私語は慎んでください。ですので、そういう意味で言うとね、やっぱり映像っていうのは怖いなと思っていて。これをちゃんと説明をするとね、あ、わかったって。メディアなんかも変わってきたんですよ、今。やっぱりね、ＴＢＳもＮＨＫさんも、やっぱりメディアも変わってきて、おとなしくしているところも映してくれるようになったんで、これは代田教育監が相当言ってきているとは思うんですけれども、そういう意味で、少し冷静な報道になってきたなと。そういう意味で言うと、佐賀新聞であるとか西日本新聞さんは、終始この問題についてもね、一貫して冷静に出しておられますので、そういう意味では病院のときと違ってね、非常に私は好感を持って受け止めます。だから、批判がだめだとかじゃなくて冷静にこれは議論をすべきだと思ってますので、そういう意味で言うと、今メディアの報じ方については非常に好感を持

って受け止めております。

**○議長（杉原豊喜君）**

１番豊村議員

**○１番（豊村貴司君）〔登壇〕**

私も最初見てですね、うわっと思いましたが、これはやっぱり中身をしっかり見ないといけないというふうに思いました。まず、知る、知らせるという部分で、あれが入り口になった部分があるので、そこから先は市長も言われてるように、しっかり、これから説明をしていかないといけないと思います。

視察に行きましたということで、これ、行ったところです。幼稚園の中で、小学校１年生と２年生に対して授業が行われていました。これがその授業の様子で、行ったときは、これは小学１年生のクラスだったですかね。各テーブルに４人から５人子どもたちがいて、このときはですね、サポート役で大人の方がそれぞれいて、高濱先生が授業を指導しながら、それに子どもたちが向かって行っていくという形でした。先生が示すこういう図に対して、子どもたちが持つ、このピースをですね、組み合わせて、それができるようになるとかですね。まあ、先ほど言われた静かにしている場面というのも、もちろんあるわけですね。こういうふうに書き取りをやっていく。この子もそうなんですが、授業中ですね、やっぱり姿勢というのを、姿勢を正しましょうというような形であったりとか、姿勢についてしっかり言われていました。子どもたちもそれを実践されてるっていうのは非常に印象深かったです。これは、できたグループに対して先生がよくできましたという形で声をかけている。それに対して子どもたちも応えてるというふうなところです。

視察に行って私が一番印象に残ったのは、先ほど言いましたように、行く前、メディアで見たときの感じ、あれだけだったら、わあ、相当騒がしいのかなというような印象があったんですが、行ってもちろん活発であり、子どもたちもすごく楽しそうにはやってたんですが、逆にですね、子どもたち、すごく先生だったり教材に向き合っているなというのが正直一番の印象でした。それを向き合わせる手法を、先生も各種とっている。例えば、これもそうです。こういうふうにしたら、やっぱり皆さんここを見るわけですね。先生がこういうふうにすることによって、ほかの子どもたちもやっていく。つまり１つのモジュール、授業が終わったときに次の授業に行く準備を、もう先生が言葉だけじゃなくて視覚的にも働きかけてる。子どもたちは、次は何である、準備をしていくというのが、そこはしやすいような形がある。さまざまですね、先生がとられてたことに対して意味があるなというふうに思いました。

先ほど視察に行ったところは、各グループに大人のリーダーの方がいる、そういう状況ではあったんですが、実際に学校で導入となると、それだけの大人の方をつけるというわけにはいかないと思います。実際にですね、長野県の北相木小学校。こちらのほうで、先生が子どもたちと、先生１に対して子どもたちと、花まるの方法を取り入れた授業、一部されてい

るということを伺っております。職員の方も、これに視察に行かれたということも伺っております。この北相木小学校、ここでの花まる学習会を取り入れた授業の様子について、どういう感じでしょうか、お伺いいたします。

**○議長（杉原豊喜君）**

代田教育監

**○代田教育監〔登壇〕**

教育委員会のほうではですね、５年ほど前から花まる学習会の手法を取り入れている北相木村の小学校のほうに視察に行ってまいりました。

（モニター使用）実際に公立の小学校の中で、公立の授業中の中で、約１カ月に１回１時間その時間を取って､花まるタイムとして同じような手法を取り入れた授業を行っています。

先生方のインタビューもあったんですが、最初はやはり抵抗感があったと。ただ、この環境の中でできることをそれぞれ導入しながらですね、北相木村なりのプログラムに変えていったという話をいただきまして、もちろん塾と同じものがそのまま公立学校、特に例えば、長野県に適応できるというのは最初から先生たちも思っていなかったようなんですが、やはり気が付いてみるとこれいいじゃないかというところをですね、どんどん取り入れて、このようなスタイルで継続して、今は新しい先生が来てもどんどんこの授業に参画して、子どもたちも生き生きとやっているという報告を受けています。

**○議長（杉原豊喜君）**

樋渡市長

**○樋渡市長〔登壇〕**

この北相木小学校の件なんですけども、もう２週間前になるのかな。ＴＢＳの報道特集で出てきましたけれども、あれ見たときに、ああ、やっぱりできるんだというのを多くの方々が思ったと思うんです。

ですので、ただこれ、映像と実際見るのでは大違いの部分もまだあると思うんですよね。だから、百聞は一見にしかずということで、先ほどちょっと副市長と話をしてたんですけども、これ保護者の方、全員とはいきませんけれども、ぜひＰＴＡで御関心を持っておられる方々に、私ども一定補助をさせていただいて、実際に行っていただくと、見てもらうということも必要だと思っていますので、これは議員各位においても同じ話です。ですので、議員さんと保護者さんと――ぱらぱら行くとね、ちょっと御迷惑にもなりかねないので、そういうちょっと制度を、予算はもう確保していますので、そういう制度をちょっと教育委員会と一緒につくろうかなと思っております。その際に私もぜひ行ければね、行ってみたいなというふうに思っております。百聞は一見にしかずだと、このように思っております。

**○議長（杉原豊喜君）**

１番豊村議員

**○１番（豊村貴司君）〔登壇〕**

ＰＴＡの方、また議員含めて、そういう視察の案があると、それはすごいことだなと思います。確かに見てもらったほうが一番早いと思います。北相木小学校が導入して５年間ですかね、継続されているということで、やはりここは見るところかなというふうに思います。

そこでですね、官民一体教育改革ということで、教育改革に民との連携が必要と思われたわけですね。伺いたいのが、例えばその教育改革ということにおいて、官だけで執り行うんじゃなくて、そこに民を入れようと思われた点。まあ、私は先ほど私なりのことを言いましたが、市長としてここに官だけで取り組むのではなく、民として教育改革をともに行う、そういうふうに思った点。また今回、花まる学習会が実際名前が挙がってますが、民といったらいろんな民があるわけですね。学習塾であったり、さまざまある中で、そこで花まる学習会さんに、その連携相手、連携対象として求めた、そういった点、この点について考えをお伺いいたします。

**○議長（杉原豊喜君）**

樋渡市長

**○樋渡市長〔登壇〕**

まず歴史的に言うと明治５年の学制の公布以来全く変わってないんですね。どういうことかっていうと、黒板があって先生が１人立たれて一斉授業を行う。これは、ある富国強兵だとかね、あるいは高度経済成長期みたいに、いい意味でですよ、いい意味で金太郎飴のような人たちをつくるには､それはよかったシステムなんですね､あるいはノウハウなんですね。しかしながら、もうそれが限界が来ているってみんなわかっているじゃないですか。だけど官だけではもう無理なんですね、官だけでは。

一方で、じゃあ市ができるかといったときに、やっぱりこれもタコツボなんですね。早稲田大学の前身である東京専門学校、あるいは慶應義塾大学の前身である慶應義塾が設置されても、やっぱりそれはそれで、もうタコツボ状態になっていて、そこで新たな教育のイノベーションというのは生まれてこなかったっていうふうに、僕なんかは思ってるんですよ。そういう意味で、図書館が官と、僕は民のＣＣＣとの官民一体だと思っていて、やっぱりね、官のシステムに民のノウハウを入れるのがこれからの 21 世紀型の､僕は新たなシステムだと思っていて、教育こそ、そのシステムが僕は必要だと思っています。これは歴史的な観点。

個人的な観点で言うと、全く僕学校に不適合だったんです。保育園中退、小学校不登校、中学校もあまり行ったり行かなかったり、高校になると、もう本当に進学でね、武雄高校進学でもうフォアグラ状態ですよ。ですので、それに反発して不登校。大学時代は、みんな頭がよすぎて、僕寝たきり、床ずれができましたよ。だけど楽しかったのは、例えば僕が小学校のときに家永塾という塾に行きました。行って――寺子屋です。すごい楽しかった。そこは受験勉強をやっていたかというとそんなことはないんですよ。漢詩を覚えたりとかなんで

すね。そこで言葉のリズム感を知らず知らずに学び取ったということなんです。それと僕は大学受験１回失敗しました。そのときに駿台に行きました。ものすごくやっぱ楽しかったです。じゃあそこが、偏差値教育やってるかって言ったら、そんなことないんです、実際。古文の読み方とかね、日本史の古文書の読み方を最初にやるんですよ。しかも楽しく。そういったときに、やっぱり民がいいぞと。

それと武雄で言うと、例えば、僕は山内のブレストの犬走さんとすごく今仲がいいんですけどね。やっぱり見てみると、僕聞きました、子どもたちに、どっちが楽しいねって。100％犬走さんのブレストが楽しいとやっぱり言うんですよ。言うんです、もう子どもたち正直ですから。だからそうなったときに、子どもたちがかわいそうじゃないですか。学校に行ってね、もう疲れ果てて塾に行ってってなるよりは、子どもたちの目線に立って、やっぱり官民一体で官のいいとこ、民のいいところを合体させるというのは、僕はいいっていうふうに自分の経験からしてもやっぱ思いましたし、歴史的な潮流から見ても、そこはちょうど僕はクロスしてると思ったんです。だから僕は、武雄市議会は本当に偉いと思うんです。武雄市議会に、これ全員に説明をしました、有志の人たちに。説明をしたときにね、やっぱりこれは、せんばいかんろうもんと。まあ、そのときまだいらっしゃいませんでしたけれども、したときに、これやっぱせんばいかんということを、やっぱり杉原議長を初めとしてね、やっぱりせんばいかんっていうことをおっしゃってくださったっていうのは、そこの意味がよくわかっておられるということを思いましたので、そういう観点から、まあ幾つもあとはありますけれども、大きくはこの２点ですよね。自分のこういうね、体験と歴史的な潮流から、民との連携が必要と思ってっていうよりもね、むしろそれしかないということを思った次第であります。

〔市長「そうだ、花まるか。議長」〕

**○議長（杉原豊喜君）**

樋渡市長

**○樋渡市長〔登壇〕**

花まるの関係で言うと、高濱さんの著書は大体全部読みました。あるいは講演も行きました。花まる学習会も見ました。そのときに、もう、正解至上主義じゃないんですね。だから、そこで考える力、生き抜く力、そしてあの塾見てもらえればわかるんですけど、子どもたちが教え合っているんですよ。僕ね、何よりもすごいなと思ったのは、人と比較しないんですね。

例えば、浦議員さんと山口議員さんって、普通こう比較をするじゃないですか。比較するんだけど、あそこのすごいところは、例えば浦議員さんを例えて言うとね、きのう、例えば浦議員さんが、ある算数のテストで３分かかったのが、今度は２分 50 秒でいったと。そしたら 10 秒伸びたといって、そこですごく褒められていくんですよね。だから人との比較じゃな

くて、きのうの自分よりきょうの自分、きょうの自分よりあしたの自分って、それが僕は求められている教育だと思うんです。それをもう体感的にやっていると。それ僕も聞きました。僕はインタビューが趣味ですので、花まる学習会に来ている子どもたちに聞きました。そしたらやっぱり、ものすごく楽しいということを言っています。

これ実際ですね、これよく誤解されているんですけど、僕の出身の東京大学というのは、偏差値詰め込み型じゃないんです。そこで例えば麻布高校とか、灘高校がやっていることっていうのは、やっぱり楽しく学んでいるんですよ、楽しく。それを楽しく学ばせてないのが、武雄高校を初めとする地方の進学校なんです。だから、やっぱりこう楽しくね、わくわくして、どきどきして学ぶって、正解を求めるんじゃなくてね、結果的に考えた結果それが正解だったというのは、官では無理だから花まる学習会にそこを求める。だから正解至上主義じゃなくてね、これからは自分が正解をつくっていくぞと。しかも楽しく、わくわくどきどきしながら。それを、僕は花まる学習会しかできないと思っているし、これ実際、武雄にもいろんな塾がありますので、いい意味でね、これは代田教育監ともよく話す話ですし、教育長とも話しますけど、いい意味で連携を深めていって、総力を挙げてね、武雄市の教育を官も民もね、そういうつまらない区切りじゃなくて、総力を挙げて子どもたちのやっぱり生き抜く力を小学校のときから養うぞということで、そういう体制をこれから求めていく必要があるだろうと思っております。

**○議長（杉原豊喜君）**

１番豊村議員

**○１番（豊村貴司君）〔登壇〕**

先ほど市長も言われましたように、達成感という部分ですね、それはやはり行って私も感じました。できたことに対する喜び、そして褒めるということが、常にやっぱりあってたですね、視察に行ったときにですね。それでまた子どもたちが、やりたいやりたい、学びたいというふうな形になって、結果的に学ぶことの持続につながってくるのかなと、それが行きたいというふうになっているのかなと思います。官民ということで、市長も今までさまざまな政策をこれまでもとってこられましたけれども、間違っても官ＶＳ民ではないということですね。ここは共に連携でっていうことですね。そういうふうに思います。高濱先生の講演ということで、先日も武内小学校でありました。すごくよかったです。これはケーブルテレビで後日流れるんでしょうか。流れるとしたらですね、ぜひ今テレビを見られている方もですね、ぜひ多くの方、これは見たほうがいいかなというふうに私は思います。

そして、メシが食える大人ということですけれども、実際に今までの質問はこの官民一体に対してのその信念、導入に対する気持ち、思いという部分を伺ってきました。ただやはり保護者としても地域としても先生としても、実際じゃあどういうふうに稼働してくるんだろうという、そこがイメージが湧かないことにはなかなか難しいと思います。

ということで、官民一体の教育改革が始まったときに、実際にどういうふうな、例えば時間割的な感じとかでもですね、どういうふうな授業イメージになるのでしょうか。これは、テレビを見ている方にもお知らせするべき点かと思いますが、よろしくお願いいたします。

**○議長（杉原豊喜君）**

代田教育監

**○代田教育監〔登壇〕**

（モニター使用）今スライドに出ている左側が一般的な小学校の時間割ということで出させていただいて、右側が新しい学校の時間割という形で出させていただきました。

このポイントはですね、まさにそもそも論、明治の学制発布以来の話になるんですが、日本の今の公教育の１つの課題として教科縦割り型の学習スタイルになっちゃっています。国語、算数、理科、社会。こういう形で教科ごとの時間割が中心となっているのですが、実はもう世の中の求めている力というのは、教科ごとではなくて、例えば記憶力であったりとか、集中力であったりとか、論理的に考える力であったりとか、言語力であったりとか、社会に出たらですね、何かの教科が得意だったということがすごく力になるんじゃなくて、やっぱりメシを食えるためには、コミュニケーション、論理的に考える、そういったことが求められている、そういった人間の骨格となるようなものを、教科をまたいでつくっていこうというのが今回の学習時間割の変化になります。

ですので、ここの青いところに書いてあるんですが、朝、例えば 15 分くらい、モジュール授業。これは教育用語でありますが、45 分に縛られない帯状の時間、15 分くらいを毎朝それぞれやっていこうと。これは教科じゃなくて、これは論理的な思考力を鍛えるためにやっていく。これは、言語の力を鍛えるためにやっていく。こういった力をまず毎日やっていこうというのが１つ大きなポイントです。

また各教科の中にはいろんな指導方法のいいところがあると思いますので、これは既存の教え方に花まる学習会の非常にいいメソッド、授業ノウハウなんかを入れていくことによって授業を変えていこうというのが、薄ブルーで書いたところです。

さらに青で書いた青空教室、なぞぺーといったのはですね、これも教科にまたがずにですね、特に青空に行って、異学年、要は１年、２年、３年だけで、それぞれの学級でやるんじゃなくて異学年混同で、もっと多様性の中で学びをしていこうというノウハウを、花まる学習会が非常に蓄えているので、そういうところをお借りしながら、公教育の中で、その時間割の中で工夫しながらやっていこうというのが右側の新しい学校の時間割というイメージです。

**○議長（杉原豊喜君）**

樋渡市長

**○樋渡市長〔登壇〕**

（モニター使用）補足をしますとね、道徳については、これはもう市教育委員会が責任を持って行いますので、ちょっと見にくいんですけど白字になっています。道徳の部分はね。

それと、私が一番危惧しているのは英語なんです。今年の秋から、いや応にも英語が導入されちゃうんですよ。英語なんかせんでよかとですよ。小学校んときから。でも、もうこれは決まってるわけです。

それで今、これのもう少し先の話になろうかと思うんですけれども、できればこういう一斉授業の形の英語よりはね、むしろ音楽で英語を取り込むと、音楽で。だから、イマジン、ありますよね。ジョン・レノンのイマジン。あれ日本語で聞くと、わけわかんないんです。だけどあれを英語で聞くと、ちゃんと韻を踏んでいて、すごく子どもたちが入っていく。そうしたときに、これどがん意味やろうかというのを調べるっていうのが、僕は生きた英語だと思うんですね。それと、あるいは体育で英語を取り込むと、体育で。例えば右に行け、とかっていったのはね、ターンライトとかね。ゴーアヘッドとかっていうこと言ったら、それがリズムとして入るじゃないですか。だって、赤ちゃんが最初から授業受けているわけじゃないじゃないですか、日本語で。やっぱり、母親と会話をしながら言葉というのは、僕は入っていくというふうに思っていますので、それをぜひ授業でやっていきたいと。

私ごとですが、私の妹は小学校の教諭です。兄ちゃん、英語の入ってきて、もうたまらんと言ってます。佐賀大学の教育学部で、英語しいきらんやったって。そういう先生ばかりじゃないと思いますよ。でも、そういう先生ばかりじゃないと思うんだが、実際、専門課程しとらんわけですよ。そういった先生たちが、また負担をふやすと、英語で。しかも、負担感ありありのところで、子どもたちは見抜きますよ。そういうよりもＡＬＴの力を借りながらね、あるいは花まるの力を借りながら、そういう子どもたちの目線に立った、僕は教育が英語に関してもね、必要だろうと。それも、行く行くはそうなっていくんだろうなというふうに思っております。

**○議長（杉原豊喜君）**

１番豊村議員

**○１番（豊村貴司君）〔登壇〕**

先ほどのスライドをいいでしょうか。

説明がありましたが、ちょっと繰り返しになるかもしれませんが、朝の 15 分間の中で、花まるの部分を導入した形で、ここの 15 分間の中で、モジュールが書き取りであったり、音読であったり、そういったものが導入される。それ以外の１時間から６時間は、基本的に今までの学校教育課程の中で行っていくんだけれども、花まるの特性が生かされる部分は、それを導入するというふうな形で理解していいんですね。１点ですね、これまでも市長の話であるとか、高濱先生の話を伺っていてですね、もう１点、ちょっとポイントとして私が思ったのはですね、先ほどもありましたが――すみません。この青空教室ですね、または野外体

験、このことに対する思いっていうのはですね、非常に市長も強くあるんじゃないかなというふうに、私は感じています。

実際に今、先ほど言われましたように、異学年交流でというふうな形で、この２時間でしたりとか、実際に、導入はどういうふうになるかっていうのはまだわかりませんが、この部分について、これも恐らく市長が求められてるところになるかなと思います。これについて、ちょっと答弁をお願いいたします。

**○議長（杉原豊喜君）**

樋渡市長

**○樋渡市長〔登壇〕**

やっぱりこれ、モジュールとなぞペーと青空教室というのは、濃い青の中の３つの大きなうちの１つだと思っていて、特に私は、青空教室は異学年で行うというのと、そうすると今、兄弟が少ないじゃないですか。だから、それで例えば小学校４年生の子とね、２年生の子がなると、そこにお兄ちゃん、お姉ちゃんの関係が出てくると思うんですよね。

その一方で僕が大事だと思っているのは、今まで学校も社会もね、トラブルを除去しようと、要するにもめごとが起こらないようにするとかね。怪我をしちゃいけませんよ。だけど、そういう、いさかいが起きちゃいけませんって。でもね、社会って、特に議会なんか、いさかいだらけじゃないですか。（笑い声）社会っていうのはトラブルの連続ですよ。訴えられたりもしますし。（笑い声）だからそういうトラブルが起きたときにどういうふうに対応するかっていうのは、これって、青空教室やっぱりいいんですよ。やっぱりこう危ないところに行かないようにするとか、危ないとこをつくるんじゃなくて、行かないようにするとか、危ないとこに仮に行ったとしても、手に手をとってね、そういう危険察知。そのためには、最初に勉強しておくとかっていうふうにするとか。もしもめごとが起きたときは、もめごとの仲裁をする子が出てきて、これは両方の言い分を聞いてね、これが正しいんじゃないかというのを皆さんに投げかけるとか、それが今までの公教育で、僕は決定的に足りなかったと思うんです。むしろ、それ担ってたのは道徳のはずなんですけど、道徳の本、結構読んだんだけど、これわかんないと思うんですよ、子どもたちが。わかんないと思うんですよ。だからそれを体験して、体感して、そこでもめごとを肥やしにしていくぞということも含めてね、青空教室っていうのは、僕は一番いいなというふうに思っております。

私、昨晩ね、代田教育監と豊永さんという変わったカメラマンの人とね、東川登の蛍の、あれ内田ですかね、行ったんですね、内緒で。あの蛍はものすごいですよ、あの乱舞の。でも子どもたちに聞いてみるとね、蛍はちょこちょこっとしか飛んでいない、あるいは見たことない。だけど、あれを例えば、野外体験でね、時間は問題かもしれないけれども、あれをみんなでこう見て、それを例えば、カメラの撮り方とか、豊永さんって変わったカメラマンもいますので、それを撮ったりとか、あるいはスケッチをするとか、しかもそれを行く行く

は親子で一緒に行くとかね、そういうのが僕は公教育だから実はできると思うんです、公教育だから。

だからそういう意味で青空教室というのはさまざまにやっぱり体感する、体験するも含めて、すごく期待をしています。これ、私も参加しようかなと思っています。

**○議長（杉原豊喜君）**

１番豊村議員

**○１番（豊村貴司君）〔登壇〕**

先ほどの青空教室含め、この花まるの部分ですね。官民一体ということで、官だけではなく民の力をということで。そこを逆に民だけで、例えば花まる学習塾を武雄にどんどん誘致するとかじゃなくて、それを官で取り入れて行うというのが、ある意味それは民だけだと、経験する人としない人が出てくる。それを地域として全体でそこはやっぱり、いいと思う部分を取り入れて、経験してもらいたい。そういう意味で、官のほうに民の力をというふうな形で言われてるのかなというふうにもちょっと思っています。その辺についてお願いします。

**○議長（杉原豊喜君）**

樋渡市長

**○樋渡市長〔登壇〕**

それもそうなんですけど、一方でね、今、塾あるじゃないですか、武雄の中でも。それを新たにね、塾を誘致しても、それは子どもたちのためになるのかなということ。あるいは、保護者の皆さんたちのためになるのかなと思ったときにね、先ほど答弁をしたとおり、やっぱり塾だとか公教育とかじゃなくてね、一緒にやっていくのが、子どもたちが望む姿じゃないだろうかということは思っています。

その一方で、既存の塾がありますので、その連携のあり方っていうのはやっぱりきちんと考えていく必要があるだろうと思っていますので、一緒になってね、ともに進んでいくような公教育のあり方をぜひ目指したいなというふうに思っております。

**○議長（杉原豊喜君）**

１番豊村議員

**○１番（豊村貴司君）〔登壇〕**

すみません、スライドを戻してもらっていいですか。

先ほど説明いただいて、授業のイメージというのがありました。野外体験、青空教室ということについても話がありました。官民一体の教育改革。実際に武内小学校がモデル校として授業が始まっていくと、そういうふうにされています。その授業を、例えば見学したり、体験会があったり、説明会があったりという中で、そのあとにそれを導入しようというところは手を挙げてくださいということで、来年度導入するところを手挙げ方式によって、いくつか選考していく、決めていくというふうに伺っています。

ではですね、実際にその手を挙げるというのが、誰が手を挙げるようになるのか。ただ、ここがですね、ある程度市としてこういうふうにという考えがあれば、地域としても学校を含めた形でも協議がしやすい、検討に入りやすいと思います。そこが見えるような形でですね、現在、考え、方針があれば説明のほうをお願いいたします。

**○議長（杉原豊喜君）**

樋渡市長

**○樋渡市長〔登壇〕**

これまでのスケジュールを申し上げますと、10月末までに希望校区の募集を行いたいと思っております。これはやっぱり半年間ぐらいかけて準備をする必要があるので、これ、いろんな説明会で、我々も言い始めていますけれども、10月末までに希望校区の募集を行い、その後、教育長を中心とする選定委員会で決定をします。その前に、どういう小学校なのかというような基準をちゃんとつくる必要があると思っていますので、これはきちんと議会にもお諮りをしたいと思っています。

そしたら各町は何を指すのかということなんですけれども。まず、その委員会を、それこそ選定委員会という言い方になるかもしれませんけれども、各町で委員会をつくっていただくということになります。これは区長が委員長。多くのところは区長会長が恐らく委員長になろうかと思いますけれども、ただ山内の場合は、西と東に分かれていますので――武雄もそうですね、失礼しました。武雄もそうですので、区長会長がいらっしゃるところは区長会長で、そうじゃないところは副区長会長さんとかね、そういった方がトップをしていただくと。副会長に各校の校長先生に入っていただくということ。それと、その委員会には区長さん全員入っていただきます。それは武雄もそうだし、山内もそうですけれども、それぞれの校区の区長さんたちがこう入っていくということになると思っています。そこの中に委員として、婦人会、ＰＴＡの方、地域を代表する方なのかな――も入っていただいて、そこで合議体で決めていただこうと思っております。その委員会が恐らく、最終的に決めるにあたってはね、例えばヒアリングをされると思うんです。例えば学校の先生であるとか、あるいはＰＴＡの皆さんであるとか、当分そういった方向等についてもね、私どもで規約をつくった上で、これもよく議会に相談をさせていただこうと思っていますけれども、これを議会終了後、直ちに公布をしたいと思っています。その中で、民主的にその区長会長、あるいは区長会長に準ずる方が委員長であるその委員会の中で決めていただく。ただし、これは区長会だけで決めるんではなくて、やっぱり校長先生というのは１つの大きな肝になりますので、それは責任のある副会長に入っていただいて、あと委員の皆さんたちも区長さんを中心として、先ほど申し上げたとおり地域を代表される方、婦人会だったり、あるいはＰＴＡの皆さんだったりに入っていただいて、最終的には10月の末までに決めていただいて、そこから、私と教育委員会のほうに希望するということになろうかと思っております。

重ねてでありますけれども、私どもからね、よくね、武内小学校もう決まっているんでしょと、そんな甘い話ありません。もし武内小学校決まらなかったら、代田校長さんも大変だとは思いますけれども、それはやっぱり地区の皆さんたちが、やっぱりやっていきたいんだということがあってこその今度の官民一体の小学校だと思っていますので、そういう意味で武内小学校が先行しているとよく言われますけど、そういったことは一切ありません。

代田先生――ね、頑張ってください。

**○議長（杉原豊喜君）**

１番豊村議員

**○１番（豊村貴司君）〔登壇〕**

検討する中で地区の区長会長が委員長となり、学校の校長先生が副会長となり、各区長が委員となる。また地域の保護者の方であるとか、婦人会の方が入ると、決定する上でですね。やはりそういった形で方法というのを示すのも、市が今回提案する教育改革でありますから、そこも提案するということが市の責任かなというふうに思いますので、先ほど言われた流れの部分ですね、今後しっかり各地域に働きかけていただきたいと思います。

もう１点ですね、やはり授業を始めるにあたって、やっぱり先生――官民一体ということで、もちろん先生が、行く行くは先生単独で行っていく部分もあると思いますが、意見交換をしながらということですので、保護者に対する説明会とかだけじゃなくてですね、先生に対する説明であったりとか、その連携、それについてはどのように進めていかれる予定でしょうか。

**○議長（杉原豊喜君）**

代田教育監

**○代田教育監〔登壇〕**

先生方への説明、連携という質問だと思うんですが、繰り返しになりますが、花まる学習会のやっていることをそのまま学校ではやるわけではないということを、繰り返しお伝えしたいんですけれども。先生方と一緒にどうやったらいいのかということなので、説明、連携というよりは、一緒につくり上げる機会をいっぱい設けていきたいなというふうに思っています。

実際に、先日６月４日にですね、高濱先生の初顔合わせをして、職員で意見交換をしました。６月の下旬には、今度は実際じっくりとですね、そのプログラムについて、先生たちと一緒に研修会をしようと。さらには夏休み期間中に東京に行ったりとかいうことでですね、繰り返しになりますが、一方的に説明をするという内容ではなくて、先生方と一緒に 10 月までの間、約３カ月間にわたってプログラムを一緒につくっていこうというふうに思っています。予定では 10 月の 14 日、２学期が始まるタイミングでモデルとなるような授業はスタートさせていきたいなというふうに思いますが、これについても、それが完成形でじゃなくて

ですね、その後、来年度に向けてどう修正したらよりいいものになるのかということでつくり上げていきたいというふうなスケジュールで考えています。

**○議長（杉原豊喜君）**

樋渡市長

**○樋渡市長〔登壇〕**

あえて申し上げますとね、この前武内小学校であったときに、高濱さんの説明に来なかった先生もいらっしゃるんですよ。いろんな用事があったかもしれませんけれども、私は最優先で来るべきだと思うんです。その上で、反対するんだったら反対だと、賛成するんだったら賛成だと。人の意見を聞かずしてね、反対というのはないでしょうと。しかも学校の先生がね、それをやっちゃあね、僕は示しがつかないと思いますよ。

ですので、これはね、ぜひ全部が全部行く必要は僕はないと思うんですけれども、少なくとも先ほど代田教育監からあったように、コアになるもの、核になる説明会であったりとか懇談会というのはぜひね、これは武内小学校のみならず、これからふえていくと思いますので、それはぜひね、お越しをいただきたいと思っています。そのためにも、私どもとしては早め早めにね、やっぱりそのスケジュールを立てていく必要があるだろうと思っていますので、それは教育委員会にしっかり要請をしたいと、このように思っております。

**○議長（杉原豊喜君）**

１番豊村議員

**○１番（豊村貴司君）〔登壇〕**

今後ですね、いろんな視点に立ってさまざまな意見交換をしながら取り組んでいく。それがまたいいものとして進んでいくことを期待しますと同時に、私も動く部分はしっかり動いていかないといけないなというふうに思います。

先ほど意見交換という部分で言いました。私、冒頭に述べましたが、20年間リハビリの仕事をしながらですね、患者さん等々いろんな意見も伺ってきました。私、訪問リハビリというのもこれまで何年も担当してやっていたんですが、実際に生活現場の中でリハビリをやると、そういうこともしていました。

先日、その環境があって、私のリハビリの先輩にですね、訪問リハビリ、障がいをもっている子どもさんの家に同行させてもらいました。その保護者の方からもいろいろ意見を伺いました。こちらは在宅酸素療法ということで、呼吸機能に障がいがある方に対して酸素を装置から供給する、そういう機械です。私も喘息で入院したときにこれを行ったことがあります。５リットル行いました。呼吸器疾患、さまざまあります。これを使うのもですね、例えば夜間だけ使う方もあれば、24時間使わなければいけないという方もあります。実際に、この装置は医療保険の対応になりますので、その方のですね、保険に応じた自己負担割合という形になってくるんですが、この電気料金については個人負担になってきます。酸素の量が

やっぱり高くなれば、その分電気使用料というのも高くなります。例えば、低い酸素量であれば50ワットぐらいなのが､酸素供給量が多くなれば530ワットぐらいになったりとかですね。ワット数が上がれば電気料金という部分にも、もちろん跳ね返ってきます。

こちらですが、これは在宅呼吸ケア白書 2010 というところで出されている分ですが、在宅酸素療法を行っている患者さんに取られたアンケートです。そこで一番、46%にあった分がですね、酸素濃縮器の電気代を助成してほしいという意見がありました。全国へのアンケートの結果です。先ほどの私が伺いましたところでもありましたが、ほかにも在宅酸素という部分でですね、こういった点があります。武雄市として、全国的に見たらですね、全ての自治体がというわけではなくて、自治体としてされているとこもあります。ただし、いろんな規定を設けて、全部の患者さんにというわけではないんですが、電気料金の助成をされているところもあります。在宅酸素、電気料金のかかるけんしませんというわけにはいかんとこ、あるわけですね。武雄市として電気代の助成という部分、これについては、いかがでしょうか。答弁をお願いします。

**○議長（杉原豊喜君）**

中野くらし部長

**○中野くらし部長〔登壇〕**

おはようございます。

今お尋ねのありました、在宅酸素療法者の方への電気代の助成ということでございますが、現在、市といたしましては、利用者の数等、全く把握していないという状況にございます。そういった要望というのも、なかなかこちらのほうにも聞こえてきていないということでございますので、現段階では助成というのは考えていないという状況であります。

以上です。

**○議長（杉原豊喜君）**

樋渡市長

**○樋渡市長〔登壇〕**

ちょっと補足をしますとね、こういう要望っていうのは、これが大事じゃないって言ってるつもりじゃないですよ。もう、いっぱいあるんですよ。いっぱいあって、これは、そういう補助というのは、市民の皆さんたちの税金を投入することになりますので、そういう意味で言うと、我々はバランスをちょっと考えなきゃいけないということにもなります。ですので、これがちょっと私も初めてこれ聞いた話なんですね、実は。ですので、これが例えば患者さんであるとかね、例えば医師会とかいうので、これは本当にしなきゃいけないということになったときには、それはね、よく議会と相談して行うことになろうかと思うんです。

ですので、これは初めての議会ですので、要望があったからそのままね、これやってくださいということは、ちょっと今後はね、差し控えてほしいなっていうふうに思います。(笑い

声)

**○議長（杉原豊喜君）**

１番豊村議員

**○１番（豊村貴司君）〔登壇〕**

そうですね、さまざまな声を伺いながら、また、そういった患者さん含め、さまざまな、私が行ってきた分野でもありますので、いろんな声を伺いながら、また今後取り組んでいきたいと思います。

そういう医療介護の分野で取り組んできました。先日、ある総会で会長さんが言われていました。これから健康寿命を伸ばすようにしていきましょうと。グラフに示していますが、平均寿命に対して健康寿命というのがあって、健康寿命というのは規定がさまざまあるかもしれませんが、日常生活で介護を要しない状態、こういうのが健康寿命というふうに言われてます。冒頭述べました、少子高齢社会であるとか、これからの社会情勢の中で、つまりこの健康な状態、男性であれば平均寿命に対して 9.13 歳の差があり、女性であれば平均寿命に対して 12.68 歳の差がある。つまり、この期間が何らかの支え、介護を要する状態にあると。ここに社会保障が絡んできたりっていうわけです。ですから、会長さんも言われていましたが、この健康寿命を伸ばすことによって、私たち自身も足腰を強くして、もちろん地域としての財政という足腰も強くしていきましょうっていうふうな形になります。

さまざま、少子高齢社会に対してはですね、いろんなカテゴリーでの対応があると思います。もちろん子育てのことであるとか、雇用のことであるとかですね、医療に対しての必要な部分はもちろんしないといけないと、いろいろあると思いますが、今回、介護予防という部分でですね、先ほど言いました健康寿命、そこを伸ばす１つとして介護予防事業というのがあります。ちなみに、これはある老人クラブさんの中での介護予防施設。実は、私がこれ、います。私もこれまでいろんなところでですね、介護予防教室というのをやってきました。実際に武雄市においてですね、この介護予防事業、先ほど言いました、これからの社会に対して、やっぱりこういった部分に対応していって、ふくらんでくる社会保障、そういった部分を抑えていくというのも必要な部分かと思います。その１つとしての介護予防事業、武雄市においては現在どのように実施されていますでしょうか。また、参加者数などの状況があれば、それについても答弁願います。

**○議長（杉原豊喜君）**

中野くらし部長

**○中野くらし部長〔登壇〕**

お尋ねがございました介護予防事業の実施状況ということでございます。現在、この介護予防事業につきましては、大きく２つの種類の事業となっております。

１つは 65 歳以上の方の事例、介護保険の認定を受けていらっしゃらない方、そういった

方を対象に、まず郵送で生活機能の調査を行っております。そこでちょっと問題があるなという方につきましては、市のほうから看護師等が訪問して調査を行っております。そういった方を対象に、要介護状態になる最大の要因と言われております下肢機能、足とか腰とかの低下、それとか、お口のですね、口腔ケアがうまくできていない。そういった方々、問題があった方を、また絞り込んでおりまして、そういった方を対象といたしました、２次予防事業としての事業を行っております。具体的にはどういったものかと言えば、民間施設のプールを利用しての水中運動を行う事業とか、それとか、歯医者さんに来ていただきまして口腔機能を向上するための講座とか、そういったものを行っておるところでございます。いわゆる、そういった２次予防事業も１つの取り組みとしてやっております。これに加えまして、そういった、広くですね、高齢者の方々を対象といたしまして、各地域の公民館などで、現在老人クラブを中心に行っております介護予防教室とか、そういった事業に現在は取り組んでいるところでございます。

なお、お尋ねがございました、参加者ということでございますが、１次介護予防事業、２次の予防事業あわせまして、これ、延べになりますが、約 3,600 人という推移になっているところでございます。以上であります。

**○議長（杉原豊喜君）**

１番豊村議員

**○１番（豊村貴司君）〔登壇〕**

さまざま取り組みがですね、介護予防事業としてされているということで、延べ人数として 3,600 人がこれまで関わってこられたということです。

こちらのグラフですが、これは平成 23 年度の年齢階級別１人当たりの医療費です。一番少ないところで 15 歳から 19 歳。１人当たりの医療費ということで、これを見てもらってわかるように、年齢が高くなればどうしても医療費というのは上がってくると。特に 70 歳以上とかっていう部分ではですね、伸び幅も大きくなってきます。そういったところで、やはり予防というのが、冒頭述べました社会保障費というところにも関わってきます。大事になってきます。

よく言われていますのが、2025 年っていうのが言われています。これが、団塊の世代の方々が 2025 年に 75 歳になるということです。つまり、団塊の世代の方っていうのは人口も多いわけですから、このグラフでもありますように、現在、１人当たりの医療費が高くなっているところの割合もふえてくると。そうなったときに、財政的な部分とか、そういったところの影響も出てくるんじゃないかっていうことが１つ危惧されているところであります。そういった意味でですね、予防というのを早めに取り組む、そういったことも必要と思います。

ロコモというのがあります。すみません、時間があまりありませんが。ロコモ、メタボではなくて、ロコモです。皆さん御存じでしょうか。これは体を動かすにあたって、体を支え

る筋肉とか骨、関節、そういった部分が弱くなってくると支えが必要になりますよということで、ロコモティブシンドローム、運動器症候群として言われています。つまり、逆を言えば、こういった体を支える筋肉、骨、関節、体を、運動器を弱くならないようにしていく。それが支えを必要としない介護予防にもつながるということで、ロコモ、全国的にもですね、現在これについて取り組みがされているところです。佐賀県においてももちろん行われていますし、武雄市においてもロコモについての話、講演会があったり、実際私もしたことがあるのですが、そういう動きはあっております。

じゃあ、そのロコモっていう部分ですね、なんで大事なのかって言います。要介護の原因というのがありまして、これは厚労省のほうで出されている分ですが、脳卒中が21.5%、多くの割合を占めてます。認知症等がありますが、ここに挙げています関節疾患、骨折転倒、脊髄損傷、先ほど言いました、ロコモという部分での運動器に関わる部分、こういった部分が全体で20%を超えて、この中の４分の１ぐらいになってくると。つまり、こういった運動器系に対しても取り組みを行っていくことが介護予防にもつながってくる。だからロコモっていうのが大事なんですよということで、国のほうも言われてます。

そこで、武雄市としても、介護予防についてさまざま取り組みをされているということではありますが、私が１つ提案をしたいのはですね、介護予防運動指導者の育成事業、これを幅広く行っていく。例えば、各町とか各公民館単位でそこの地域の人たちが指導者となって、その地域の人たちに対して、ともに介護予防、体を動かす、健康づくりについて取り組んでいく、そういうふうなことをするというのは、広く予防を進めていくという部分で、いいんではないかというふうに思います。各公民館単位で、その地域の人が指導者となって地域の方々と予防事業に取り組む。公民館ということで家に近いところですから、参加する方も参加しやすい。つまり、介護予防運動に取り組む方をふやすことにもつながっていく。また、ときにはですね、三世代検診ということでされてるところもありますが、子どもたちが地域の大人、じいちゃん、ばあちゃんを招待して、健康、体力測定を行ったりする。そういった事業をされてるところもあります。子どもが招待すれば、やっぱり行くわけですね。子どもが行くけん、孫が呼ぶけんがやっぱり行かんばいかんというふうな形で、取り組まれてます。こういった各公民館単位で、こういう予防についての取り組みを行っていく。その１つとして、介護予防運動指導者の育成事業、これを広く行っていく。これを提案したいのですが、いかがでしょうか。

**○議長（杉原豊喜君）**

樋渡市長

**○樋渡市長〔登壇〕**

これね、いくらつくっても一緒なんですよ。（笑い声）本人が行く気がないとね、本当にこの手の議論って多いんですよ。器だけつくってね、器を見てみたら誰もいないというのが

今までの行政のパターンなんですね。

なぜ図書館にあれだけ人が集まるかというと、行きたくなるんですよ。行きたくなる。だから、あの図書館というのが、今、日本を代表する図書館に今なってるわけですね。

だから一方で、これが、この運動指導者が要るのを否定するわけじゃないです。やっぱりきっかけというのは必要なんで、まず永島で、まずやってください。（笑い声）まず隗より始めよ。その上でまずやってみてね、いや、これはちょっとね、こういう制度が必要だとか、予算が必要だとか多分なっていくと思うんですよ。だから、まずやってみて、それで行政として広める必要があるだろうということになったときにね、そこから議論していきたいなというふうに思っております。ぜひ、豊村議員におかれては、そういう中でね、議会活動のみならず、地域活動のリーダー、中心として頑張っていってほしいなということを、この分野は特に、この分野は豊村さんしかできないと思ってますので、期待をしたいと、このように思っております。

**○議長（杉原豊喜君）**

１番豊村議員

**○１番（豊村貴司議員）〔登壇〕**

そうですね。介護予防という部分で、健康づくりということでありますが、私が狙った奥にはですね、こういったことをしながら地域の中で世代間交流を図っていく。そういうきっかけにもなればなというのが、奥の狙いとしてあるところです。

先ほど市長も言われましたように、永島でということで、やります。ぜひ、区の役員さんにも提案して、そこは私、やりたいと思います。その結果についてですね、どういうふうにやってますというのを、また改めてですね……（発言する者あり）はい、します。そこで、これを武雄市内で広げていきましょうということでやりたいと思います。これは、全体であったらですね、すごい地域になると思います。１つのモデルになると思いますので、私もそういった分野で生きてきた人間ですので、テーマとしてこれから一生懸命取り組みたいと思います。

時間となりましたが、これで私の一般質問を終わります。

**○議長（杉原豊喜君）**

拍手はしないように。（笑い声）

以上で、１番豊村議員の質問を終了させていただきます。

ここで、モニター準備のため、10 分程度休憩をいたします。